

「村民との対話」E班のまとめ

報告者 K：菅野義人（比叡地区代表） 司会 M：溝口勝（東京大学）

記録 S：鈴木心也（東京大学） 参加者 Q：約 15 名

報告者から資料「飯舘村と村民の復興を考える」（添付）について説明の後、参加者から質問に答える形で議論が進められた。

【質疑の内容】

Q:飯舘村村民は現状でどこに避難しているのか？

K:資料に詳細に記述がある。ほとんどが飯舘村から 1 時間くらいの県内にいる。

Q:土壌放射能の鉛直分布はどうなっているのか？

K:表層に溜まっているといわれるが、現実的にはイノシシに攪乱されていたり、ヤナギが生えていたりで一様ではない。そのため現場で使える測定器の開発が望まれる。

Q:ため池の除染はしないのか？

K:水で遮蔽されるといわれるが村民としては心配だから除染したい。ため池の土壌サンプリング調査が必要。

M:ため池の泥は表層だけが汚染されているので、この泥を高分子ポリマー等の硬化剤で硬化させて水を貯めて温度変化で巻き上がらないような工夫をすればよい。ため池はセシウムの防波堤ともいえる。

Q:までのいな農村計画をどう考えるか？

M:撤退の農村計画という観点から言えることは、撤退とは崩壊を待つのではなく農地の潜在力を維持する意味が大きい。時間をかければ解決することもある。しずれにせよ農業経営の統合が必要。

Q:世帯の分断状況をどうするか？

K:震災前は 1700 世帯だったのが震災後は 3197 世帯に増えた。つまり 1 世帯当たりの労働力が減少した。手間をかける仕事はできないので、土地を集約し将来へ繋げる努力が必要。

Q:循環型農業はできないのか？

K:セシウムの影響・土の肥沃度・安全安心の確保という点から考える必要がある。汚染された堆肥については、8000Bq/kg 以上は持ち出し禁止、8000Bq/kg 以下なら私的利用が可能、400Bq/kg 以下なら販売もできる。

【創り出す復興に関する意見交換】

質疑の後に報告者から「創り出す復興」について説明があり、そのことについて前向きな意見交換があった。

M:飯舘村の強みは何だろうか？

K:稲、牛、たばこ、山の恵みである。

M:知恵を体系化していくことが大切ではないか。

M:「創り出す復興」をハード面とソフト面から考えてみよう。

(ハード面)

太陽光発電：

QKM:メガソーラーを農地に置くのは良くない。使えない土地や家庭での太陽光発電ならば可能性があるかも知れない。栽培と太陽光発電を組み合わせれば、買い取り制度を利用することで20-30年は繋ぎとめられるのではないか。そうすれば温室で花の栽培も可能かもしれない。ただし、同時に土地利用型の農業も大切である。

(ソフト面)

M:「どぶろく」は飯舘村の切り札になるのではないか？

K:飯舘村はどぶろく特区に指定されているが、実際には何かと細かい基準に従わないといけないので、どぶろく本来の良さが失われてしまっている。

M:ふるさと意識を繋ぎとめることが大切ではないか？

K:戻らない人への援助をどうするかが重要。

Q:都会人から見て開かれた村にすることが大切である。そのためには、村民を戻す方法と村民外の人を引き寄せる方法がある。

K:飯舘村村民が集団で別の場所で移民となるのは疑問である。

K:とにかく、飯舘村に死ぬ直前まで元気に居られるようにすることが重要である。

QKM:インフラ整備に特化したサービス拡充を図ってみてはどうか。具体的には、介護予防、健康増進、生きがいつくり、終活*などが考えられる。

*終活(しゅうかつ)とは「人生の終わりのための活動」の略であり、人間が人生の最期を迎えるにあたって行うべきことを総括したことを意味する言葉。

【感想】

義人さんが論点をまとめてくれていたのので、どぶろく談義で横道に逸れたことを除けば、有意義な議論ができた。

(文責：溝口勝 2014.6.20)